武蔵野市特別支援教育推進計画策定委員会（第7回）議事録

- 日 時 平成21年1月26日（月曜日） 午後6時30分から午後8時30分まで
- 場 所 武蔵野市役所 812会議室
- 出席者 前川委員、橋本委員、國松委員、田中委員、熊井委員、中本委員、永井委員、
中野委員、山田委員、伊藤委員、萱場委員、鈴木委員、吉原委員、

1 開 会

【委員長】 皆さん、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。始めさせていただきますと思います。

まず、お手元にあります資料の確認と、それから議事録の確認に関しまして、事務局のほうからお願いしたいと思います。

2 議 事

(1) 議事録の確認

【事務局】 <修正箇所について報告>

すでに事務局より議事録を送付していますが、本日再度確認いただきたい。異議がないようなら、HPに掲載したい。

【委員長】 異議はありませんか。

[異議なし]

【委員長】 異議がないようなので次の議題に入ります。

今日の一番重要なところの理念及び基本的な考え方として、事務局のほうでご説明をいただいてから議論に入りたいと思います。よろしく願いいたします。

【事務局】 それでは、説明をさせていただきます。ご自宅のほうに送付いたしました、横の1、2ページと体系、この2つを使って説明をさせていただきます。

では初めに、特別支援教育推進計画の基本理念につきまして、1ページをもとにご説明をさせていただきます。

事務局では、これまで6回にわたる策定委員会において出されました皆様方のご意見などをもとに案を作成してみました。どのようなご意見をもとにしたかといいますと、例えば保護者の理解を深めるとともに、ともに力を合わせる大切である。あと、乳幼児時代の定期健康診断結果等で重要な支援情報が保育園や幼稚園に、さらには小学校、中学

校に途切れなく伝わりといった縦の連携が途切れないようにすることが大事だということ、また、同じ時代に同じ地域に生きる人々、また、同じ地域の関係機関がともに力を合わせていくことが大切など横の連携の大切さということ、そういった意見を伺うことができました。

そんなご意見をもとにしまして、そこに示しましたAとBの2つのメインテーマになるようなものと、それを受ける形で下に4行の文章を考えました。基本理念というのは、AかBかのメインテーマと下の4行を含めまして、一応基本理念という形で押さえました。

それでは、きょうは初めての登場となりますので、読みながら紹介します。

候補Aは、「願いをつなぎ・支援をつなぎ・夢につなぐ武蔵野市の特別支援教育の推進をめざして」、候補Bのほうは、「共につながり 共に生き 共に育つ 社会の実現をめざして」という、今日はこのAかBかというあたりでご意見をいただければと思います。そして、そのA Bを受ける共通な4行としまして、今までのご意見などを参考に、ここには「保護者・園・学校そして関係機関との切れ目のない連携づくりのもとに、幼児・児童・生徒の一人一人の特別な教育的ニーズに応え、その能力を最大限に伸長するために、乳幼児期から学校卒業後までを見通した多様な支援と指導を通して、社会的自立を図ることのできる力や共に生き、共に育つ地域や社会の一員として生きていける力を培う武蔵野市教育支援プランを推進します」という事務局の案を考えさせていただきました。

少し説明が足りないので、その言葉にどんな願いが込められていたかというものをその下に示しました。例えば「願いをつなぎ」というのは、子どもの願いとか、保護者の願いとか、教師の願いなどがそこには込められています。子どもの願いとしては、友達や先生に自分のことをもっと知ってほしいとか、もっとわかりたいとか、もっとうまく生活したいとかといった願いがあるかと思います。

保護者の願いとしては、先生や周囲の人たちに、わが子を知ってほしいとか、わが子がよりよく成長していくにはどうしたらいいか一緒に考えてほしいとか、将来のことも心配である。

教師の願いとしては、校内の先生や保護者の方に、子どものことをもっと理解していくので一緒に考えてほしいとか、専門家の力をかりたいとか、保護者と情報を共有し合って支援していきたいとか、

そういう子どもや保護者や教師の願いを、一人一人孤立したものではなくて、それをつないでいきたいというのが「願いをつなぎ」。

「支援をつなぎ」は、先ほど言いましたように、縦の支援、保護者から保育園・幼稚園－小学校－中学校－特別支援学校。そして、横の支援としては、同じ時代に生きる保育園・幼稚園・小学校・中学校－医療－福祉－専門家－教育委員会等が横でつながる。それが「支援をつなぎ」。

「夢につなぐ」というのは、子どもたちが社会的に自立するとか、地域の一員として生きていける力、卒業後のことまで、夢がかなって実現するというのが「夢につなぐ」というような意味が込められています。

候補Bのほうは、「共につながり」というのは、同じような中身なんですけど、言葉はちょっと違うんですけど、さまざまな支援者によるネットワークでの支援、個別の声に耳を傾け学び合う支援、それが「共につながり」。「共に生き」は、ライフステージに合った支援、地域社会の中での支援、縦横のつながり。「共に育つ」は、交流教育及び共同学習を通じた支援、確かな基礎学力として生きていく力を身につける支援。このような願いがAとかBの文章に入っておりますので、後の協議の中で参考にしていただければと思います。

それでは、基本的な考え方というほうです。今案で示しました基本的な理念に基づいて作成することになるのが基本的な考え方です。2ページにあります。ここには、理念に基づいたさまざまな事業を実施していく上で大きな4つの柱が示されています。1つは、一人一人の教育ニーズに応じた指導・支援。指導・支援の実際の場面、学校だとか、組織だとか、それを支える研修とか、人材の派遣といったことが含まれております。

2つ目は、何といたっても子どもたちを取り巻く児童、子ども、市民、そして保護者、それぞれがこの特別支援教育ということに対して理解を深めてともに成長を見守っていくというような、理解の促進についてが2番目の柱です。

3番目がライフステージを視野に入れた切れ目のない連携の仕組みづくり、縦と横の連携が切れ目なくきて、その子にとって乳幼児から卒業ということまで見通して、それが切れ目なくつながっていくというようなことを連携の仕組みづくりというところに入れました。

4つ目が、前から少しここで論議されました新たな整備、特別支援教育を推進していく上で新たな学級の設置とか、子どもの状況に多様に対応していくための学級の整備というようなことが入っております。

これは、先ほどの理念を受けた4つの大きな柱なんですけれども、それが言葉だけで終わらないように具体的な事業を推進していく上で大きな柱となるものがこの4つの柱に

なります。この4つの柱が、今示しました1から4までのそれぞれの項目がこの4つの柱に対応するようにできております。したがって、基本的な考え方が実際の計画の上ではこういう形で反映されてきているというような流れでつくってあります。

以上、基本理念的なこと、そして、それを受けた基本的な考え方について、簡単ではありますが、一応説明をさせていただきました。

以上です。

【委員長】 ありがとうございます。1ページ目と2ページ目のところに関しまして、丁寧に説明をいただきました。ご質問があれば先にお伺いをして、そして案を出していただきましたので、そのことについて検討したいと思います。

それでは、事務局のほうで2つ案を立てていただいておりますけれども、きれいな言葉がひとり歩きしてもしょうがないですので、中身を踏まえて、ただ看板としてどちらかの案にまとめたいということで、ご意見いただけますでしょうか。どうでしょう。この案に関しては、パブリックコメントで何かないんですか。

【事務局】 そうですね。パブリックコメントの1ページ、1次回答案のところの1番、2番、3番、4番、そこに理念に該当すると思われるものをまとめてあります。パブリックコメントのほうで言われているようなところにつきましては、例えば市の上位計画の調整計画で述べているようなものを引用して、こんな考え方を計画のベースにしてほしいというような意見もありました。あと、子ども本位とか、保護者のほうの意思を聞き取るというような形とか、保護者の意向とか希望の尊重とかというような言葉も出ておりますし、それから、子どもの持っている能力を引き伸ばしてほしいというような言葉も入っております。

【委員長】 ありがとうございます。そういう意味では、コメントをいただいた部分に関しましては、それが盛り込まれた紙面にいずれにせよなっているということですね。

【事務局】 はい。ほとんど入っていると思います。

【委員長】 いかがでしょう。ご意見があれば、決定ができなければ、事務局やこちらのほうで一緒に考えていきますが、ぜひともご意見をいただいて、それを踏まえて考えていきたいと思いますので、いかがでしょうか。何かおありですか。ぜひ聞かせてください。

【委員】 私の感覚的なところなんですけど、AとBをまぜたらどうかなと思ったんですけど。「願いをつなぎ・支援をつなぎ、共に育つ武蔵野市の特別支援教育の推進をめざして」という。「夢につなぐ」とかって、本当にとってもすてきな言葉なんですけれども、現実的な

ほうがいいのかなどというところで、この3つを合わせたらどうかなと思います。

【委員長】 「夢につなぐ」という部分を「共に育つ」という言葉にかえて、より具体的にということですね。

【委員】 そうです。

【委員長】 ほかにはいかがでしょうか。こういう理念というのは、トップダウン式にこうなってもしょうがないので、ボトムアップ的に、保護者の方が出席していただいているので、どうですか。

【委員】 今、山田先生がおっしゃったとおりで、私もちょっと、「夢」という言葉はあんまり具体的でなくて、実現性のないような……。ご説明の中に実現させるという説明があったので、夢を実現させるという意味合いとしてはわかるんですけども、「夢につなぐ」だけだと、描いているだけのような印象があって、もう少し積極的に実現させていくぞという、そんな言葉のほうがいいのかなどという感じはしました。

【委員長】 理想や夢で言葉がきれいで終わってしまわないためにも、できるだけ具体的にという形で、そういう意味では、「夢につなぐ」のかわりに、「共に育つ」という言葉のほうが具体的な感じがしますでしょうかね。

【委員】 はい。

【委員長】 いかがでしょうか。

【委員】 私は逆に、特別支援を必要とするお子さんや保護者の方も夢を見ることができるといような希望を結構感じたんです。願いをつないで、支援をつないで、しかも夢を見ることができるとい、すごく希望を感じるいいフレーズだなと思ったんですが。「共に育つ」とか「共に生き」とかというのは、結構あっちこっちで聞いた、使い古されたような感じがして、夢を見ることができるといのはすてきだなと思ったんですが。

【委員長】 中身のところでそれを実現していこうとしっかり読めれば、そういう意味では言葉のひとり歩きではなくて、むしろ我々の夢をまさに広げてくれる言葉としてあえて残しておくということですね。

【委員】 はい。

【委員長】 いかがでしょう。学校の先生方はどうでしょうか。こういう理念なんていうのはよくおつくりになって、お得意な分野だと思いますが。

【委員】 確かに夢なんでね、最大の夢のある言葉でなくちゃいけないというのはあるんですけども、中身との関連もあるしね。候補AとB、どちらがしっくりするかという

ことで検討した後で振り返ったほうが、どっちがしっくりするか、あるいはいろいろな文章を織り混ぜるのか。私は、個人的にはあんまり美しい言葉よりも、地味な言葉が好きなので、いいんですけれども。

【委員長】 おっしゃるように、確かにこれから中身を見ていく中で、またいろいろと行ったり来たりをしていきたいと思いますが、今の時点でご意見があれば、ほかの先生方はいかがでしょうか。

【委員】 どっちを選ぶんですかと言われれば、私はAを選びました。それは、「共につながり 共に生き 共に育つ」というのは、下の4行の中の一番最後に、「共に生き、共に育つ地域社会」という形で同じ言葉が繰り返されているということが1つです。

もう一つは、このパブリックコメントの中の1番の方が、やっぱり保護者の意向・希望、それから、何よりも子どもの意思ということ述べられている。そして、それを理念の中で触れていますよとお答えになっている。じゃ、これはどこで答えているのかなという、やっぱり「願いをつなぐ」ところだというふうに思いました。

それから、「支援をつなぐ」というのは、この間、先ほど小山田先生の話の中にありましたけれども、切れ目のない支援ということで、やっぱり支援と支援をつないでいくということが私たちの1つ大切にしてきた事柄だろうと。ただ、「夢をつなぐ」だけはね、よくわからないんですが、これをとっちゃうと、大概こういうのって3つだから、2つというわけにいかないんで、まあ、夢でよろしいのではないかなという、固執はしませんけど、そんな気がしました。

【委員長】 これはやっぱり3つぐらいだと響きがいいんでしょうかね。

【委員】 私は、教育の分野からするとAのほうが教育的かなと。Bは社会福祉的な感じがして、特に特別支援教育でうたわなくても、全体として行政が実現していくものだろうというような感じがしましたので、どちらかというAのほうがかなというふうに感じました。

【委員長】 ありがとうございます。そちらのほうからございますか。

【委員】 去年は「つなぐ」というのが市長のテーマで、ずっとそういう事業展開が多かったんですが、今年は「はぐくむ」と言っていますので、「育つ」はぴったりなのかなと思って聞いていましたけど、確かに私は、「夢」もそうですけど、「願い」も最初はちょっと違和感を感じたぐらいなので。ただ、皆さんの意見を聞いていると、「願い」はいいのかなと思いますけど、確かに「夢」は少し違和感を感じたところです。

【委員長】 ほかにございますか。

【委員】 我々は行政側において、計画という話になると、どうしても夢にというところが若干……。本当に夢があったほうがいいんでしょうけれども、計画の基本理念という話になると、どっちかという「共に育つ」のほうがもうちょっと具体性があるのかなとは思いますが、ただ、AかBかという話になると、私はやはりAのほうがいいかなと思いますし、別に行政だけで作っているわけではなくて、市民の皆さんのいろいろなご意見をいただいて作る計画ですので、別に私はこだわりませんので、このままAでもいいかなと思っております。ただ、行政がつくると、そういうことはなかなか使わないケースが多いかなと思っております。

【委員長】 どうでしょう、先ほどご意見があったように、もう少し中身を見ながら、また行ったり来たりという形で、中身がしっかりしていれば、ここに夢のあるような言葉が載っかっていても恥ずかしくないんでしょうが、中身がそうでなければ、言葉だけだとちょっと恥ずかしい感じもありますので。今、非常に貴重なご意見で、今見ても、どちらがというわけではなく、どちらにもやっぱり非常に重要な意味があるようなので。

【事務局】 欠席されている委員からは、なるべく短いほうがいいなど。上は長過ぎると。「夢」という言葉はやっぱりその受けとめ方で、いわゆる夢に終わっちゃうという意味の夢と、ちょっと微妙なニュアンスがあるということで、そこをちょっと、というふうに感じておられたということと、それから、Bのほうが基本的には短くていいんだけど、教育ということを考えると、社会の実現というのはやっぱり教育という範疇をはみ出ているんじゃないか。やっぱり行政全体で実現することだから、例えば「共に学び・支え合う教育の実現をめざして」というような、教育というところに限定したほうがいいんじゃないかということをおっしゃっていました。

【委員長】 後半の部分を、そういう意味では「教育の実現をめざして」と。社会というところまで広げないでということですね。

【事務局】 そうですね。そんなような形じゃないかと。

【委員長】 いかがでしょうか。

【委員】 私も今の意見を伺いながら、Bのほうは「社会の実現」というと、ちょっと大きなくくりになってしまうので、特別支援教育が果たす役割というんでしょうかね、それはそんなに大きなくくりよりも、むしろ目の前にいる子どもたちにどうかかわっていくかなので、やっぱりその「つなぎ」というほうが、そこにいる子どもたちへのかかわりが

見えてくるので、私もAのほうが教育という観点からはいいのかなというふうに感じました。

【委員長】 確かに視点としては、今、私たちはまず目の前のことということで、教育というところでということ。大変貴重なご意見が幾つかあり、おもしろいですね。この辺をまとめるのは大変なことになると思うんですけども。ただ一つははっきり言えるのは、こっちはとても嫌だとかいうようなご意見は出てなかったの、事務局のほうで考えていただいたことというのは、今までの話し合いの中でのエッセンスがまとめられていると思うんですけども、一番大事なの中身のほうなので、一旦ちょっと中身に移って、また後半戻りたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

(「はい」の声あり)

【委員長】 そうしましたら、最終報告のこの後の続きにつきまして、今ご紹介いただいた4つの柱があるわけですが、1つずつご説明いただければと思います。

【事務局】 それでは、3ページからになります。

【委員】 基本的な考え方のこの4つの部分は今からですか。

【事務局】 それも含めて理念、基本的な考え方というふうに。

【委員】 ごめんなさい。2ページの部分でよろしいですか。2点あるんですが、1つは、(2)の特別支援教育に関する児童・生徒及び保護者、市民への理解の促進という、この言葉遣いの部分なんです。「特別支援教育に関する」という、この前書きのこの部分がかかるのは、特別支援教育に関する理解の促進という意味ですよね。だとするならば、この言葉の形容詞を後ろに持って行って、児童・生徒及び保護者、市民への特別支援教育に関する理解の促進というふうにしたほうが……。どこにかかるのがちょっと初め、戸惑いました。それが1つです。

それから、2つ目が、(3)のライフステージを視野に入れた切れ目のない連携の仕組みづくり、この「切れ目のない連携」というのが、じゃ、下の2行のどこに出てくるのかというと、ちょっと見えてこないんですね。「積極的に連携し、効果的な支援」ということなんだろうというふうに思うんですが、せっかく「切れ目のない」という、つまり、連続したということをここで多分強調している部分だというふうに思いますので、「関係機関が積極的に」ではなくて、関係機関が例えば「横断・縦断的に」とか、何か切れ目のないというところが説明されないと、せっかくのタイトルが生きてこないような気がしました。

【委員長】 私は、多分、「生涯にわたり」というところが入っているのかなと思います

けれども、この言葉だけじゃ、やっぱりちょっと弱いかもしれませんね。今おっしゃっていただいたような「生涯にわたり」という部分なんですよね、おそらくライフステージにかかって、幼稚園、小学校、中学校で寸断しないでと。もうちょっとこのところをわかりやすくということと、そういう意味では、おっしゃっていただいたように、「横断的・縦断的」、ただ、この言葉がちょっとわかりにくいとしたら、もう少し、前の説明で書いてあるように、「幼・小・中」という教育や保育のライフステージにおいて切れ目ないということと、あと横の広がりですよね。いろいろな関係機関と協力してという横の広がりと時間軸の広がりということ、今までの議論の中ではそういうことを強調されていたと思うので、わかりやすくということは非常に重要なことだと思います。

ごめんなさい。私自身が1ページ目のAかBかというところで、ちょっととまってしまったので、2ページ目のことに関しましても、ご意見、質問を伺いたいと思います。今、(2)と(3)のところでご意見をいただきましたが、いかがでしょうか。

【委員】 2ページに4つほど基本的な考え方という形で記載をされておまして、A3のほうの体系がございませぬ。これの一番左のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとこの4つの考え方というのは何か微妙に表現が違っているんですけれども、まあ、よく読むと多分同じことを言っているんだと思いますが、表現は、もしこの体系図を使うのであれば、合わせておいたほうがいいかなと思ったんです。

【委員長】 混乱しますよね、微妙な違いなので。

【委員】 体系図として使うのであれば、やっぱり合わされたほうがいいかなと。

【委員長】 これは、あえて変えた何か理由があるんですか。

【事務局】 そうですね。体系図のほうは、事業的な雰囲気があるんで、基本的な考え方と表現はちょっと変えてみたんですけれども、同じほうが流れはきちんと読み手には伝わるということは間違いないですね。

【委員長】 ほかにいかがでしょうか。

【委員】 2ページの(3)なんですけれども、先ほどの最初の文言との整合性なんですけれども、入学や卒業などの節目で途切れることのない支援ということを多分ここでは書いているんだと思うんですね。ですので、この文章の中に、例えば「学べることができるよう、入学や卒業などの節目で途切れることなく子どもの発達に応じた適切な」とか、何かそういうような言葉をどこかに入れれば、この表題と一致するんじゃないかと思うんですけれども。

【委員長】 先ほどいただいたご意見にもありましたけれども、せっかくですので、そこがわかりやすく、横断的・縦断的というニュアンスのことなんですが、それを今のよ
うな言葉にしたほうがどなたにもわかりやすいかなとは思いますが。

ほかにはいかがでしょうか。

【委員】 もう一つ、(4)なんですが、この表題も「特別支援学級の新たな整備づくりの
推進」というところ、もうちょっと何か……。

【委員長】 体系のほうでは、「特別支援教育推進のための基盤整備」という言葉になっ
て、こちらのほうが内容も表していますし、すっきりと整理されるんでしょうかね。

【事務局】 基本的なこの考え方は、体系のほうに合わせていくような方向で表現を修
正したいと思っています。

【委員】 上の点線で囲まれた部分の一番最後のほうに、「子どもプラン武蔵野」と「武
蔵野市障害福祉計画」の改定が予定されているというふうに書いてありますけれども、こ
れの所管部署というのは1つの課でしょうか。「子どもプラン武蔵野」は保育課とか。

【事務局】 子ども家庭課になります。障害福祉計画は障害者福祉課になります。

【委員】 そうですか。そういう1つの担当部署があるのであれば、それも書いておか
れると、市役所内でも課と課が連携して進めようとしているんだなというようなアピール
ができるかなという気がしました。

【事務局】 そのところの後ろに括弧して所管の課を入れておきます。

【委員長】 ありがとうございます。ほかはいかがでしょう。よろしいでしょうか。

そうしましたら、先に進めていきたいと思います。また、この部分には戻るような形に
なるかと思いますが、最終報告の第I章のところ、3ページ目からになりますけれども、
ご説明をお願いいたします。

【事務局】 わかりました。まず体系図を横に置きながら見ていただきたいと思います。

最初に、つくり方についての説明なんですけれども、本文の前に、体系図のその部署に
かかわるようなものを表に持ってきています。

I章、一人一人の幼児・児童・生徒の特別な教育ニーズへの対応の充実というところだ
けを、ここに改めて掲載させていただいています。それから、個別の事業のところの後ろ
には、☆印を入れて重点事業という形で位置づけております。

それでは中身に入っていきます。3ページについては改めて体系図を載せています。
それから、具体的な表記については4ページからになります。

中項目の1番、校内における特別支援教育推進体制の整備と指導・支援の質の向上。

(1)については、校内委員会の機能充実ということで、これまで委員会の中でもお話がありましたように、特別支援教育を学校の中で進めていくに当たって、この1番の校内委員会が非常に重要になってくるわけです。その校内委員会を十分機能が果たせるように進めていきたいと思います。具体的には研修とか、専門家スタッフの派遣とか、そういったものの活用を行っていくということになります。

校内委員会の進め方については、コーディネーター連絡会等で進め方についての研修会を実施していきます。

(2)が特別支援教育コーディネーターの資質向上、これが重点事業になっています。校内委員会を進める中心としてコーディネーターがありますので、コーディネーターの資質向上を図っていきたくと思っています。

そのために、②と③に市教委は、それぞれマニュアルをつくったり、研修をしたりしてコーディネーターを支援していきたくと思っています。

(3)が個別指導計画・個別の教育支援計画の作成・活用についてです。既に個別指導計画は昨年末に通常学級の中では6割ぐらいが作成されています。対象となる児童・生徒の6割ぐらいが作成されています。特別支援学級についてはほぼ100%個別指導計画がつけられているものと思っております。そういう意味では、個別指導計画を保護者同意の下にさらに進めていくことと、個別指導計画を更新していくということがこれから求められますので、そういったことを進めていくということです。

個別の教育支援計画は、医療、療育、福祉、いろいろなところとのネットワークの中で教育支援計画をつくっていくわけですが、これについては、通常学級ではまだ取り組みを行っていないのが現状です。特別支援学級の中で保護者の希望に従ってつくっているということになっておりますので、まず、特別支援学級でこの教育支援計画を取り組んでいく。そのノウハウをもって通常学級のほうにも順次広げていくということにしていきたいと思っております。その際には福祉のほうと十分連携を深めていくという内容になっています。市教委についても、③と④で支援をしていくという形をとっています。

大きな2です。こういった校内の活動を支えるために、武蔵野市として、市教委として専門家スタッフ等学校支援を充実していくということになります。(1)が専門家スタッフです。特別支援教育の校内の推進体制を底上げしていくという意味では専門家スタッフの支援をいただきたいと思います。この回数を少し増やしていくことを検討しながら、

中身も充実させていくということで①、②、③に書いてあります。

(2)は、同じく心理系になるわけですが、相談・支援の充実を図る派遣相談員、スクールカウンセラーのことを書いてあります。日常的な活動を支えるのが派遣相談員とスクールカウンセラーというふうに思っておりまして、日常活動の支援を行うということで、特に派遣相談員を中心に、学校内における保護者支援の視点をここに取り入れております。

(3)福祉分野との連携を図るスクールソーシャルワーカーの導入の検討、これはパブリックコメントのほうでも少し出ましたけれども、役割の明確化とか、なぜここが今出てきたのかというようなどころがありました。私どものほうも、発達障害と不登校とか、発達障害といじめとかという、いろいろなことでソーシャルワーカー的な活動が必要だと思ってここに書いてあるんですけれども、基本的なスクールソーシャルワーカーの定義とか主たる役割という意味では不登校等が中心になっていますので、ここに一応書いてはあるんですけれども、あとに述べます教育支援センターの機能の充実の中にこのスクールソーシャルワーカーを持っていきたいと思っておりまして、ここから移したいと思っております。それでスクールソーシャルワーカーの導入を入れながら特別支援教育の推進、あるいは不登校対策も進めていきたいと思っております。

(4)がサポートスタッフとかティーチングアシスタント、具体的な個別の支援、校内における個別の支援をする人材です。学生さんを中心にやっていたけれども、地域人材ということの視野をここに入れております。以上のそれぞれの施策をイメージとしてあらわしたものが6ページの下の図になるところです。

それから、3番に特別支援学級等の充実と通常の学級支援ということで、特別支援学級のほうが、特別支援教育の具体的なノウハウなり専門的な理解を高めているところですので、この特別支援学級の指導をより充実するという視点と、通常の学級へ支援するという視点を2つ合わせてあります。特に(1)に書いてあります通級指導学級(情緒、言語、難聴)については、自分の学級だけではなくて、通常のほうにも行って支援をする。その専門性を生かすということと、特に②に書いてありますけれども、情緒障害学級については、特別支援教育の地域拠点という位置づけの中で今後の整備等を考えていきたいと思っております。

(2)が知的障害学級です。この間、さまざまな子どもさんが知的障害学級を利用されておりますけれども、その指導のあり方というのを考える意味で、①に書いてあります「知的・発達障害」の指導のあり方を今後研究していきたいと思っております。

(3)は特別支援学級における運営委員会のあり方、(4)が特別支援教室における指導・支援の充実、重点項目にしておりまして、今、モデル校を3校やっておりますけれども、これの実績を踏まえて今後拡充していきたいと思っております。

4番目、8ページになりますけれども、管理職のリーダーシップの発揮と教員等の資質・専門性の向上。管理職のリーダーシップのもとに先生方がこの特別支援教育を進めていくために、(1)で市独自の研修会を充実していきますということです。この中に特に管理職の方の研修も含めて、充実させていきたいと思っております。

それから、(2)学校のニーズに対応した校内研修の充実。校内においても専門家スタッフ等の活用をしていただきながら校内研修を進めていただくと。(3)が特別支援学級担任の専門性の向上。通常学級の支援ということもありますので、特別支援学級の専門性を上げていくということになっております。

項目だけ読んでいるところもありましたけれども、以上です。よろしく申し上げます。

【委員長】 I章に関しまして、4つの柱に関してご説明いただきました。これまでのI章ところでご質問、確認したい事項などありましたら、いかがでしょう。

【委員】 6ページ目のティーチングアシスタントに関係する部分なんですけれども、ティーチングアシスタントはこの特別支援教育に係る個別支援に非常に有効な1つの手段であるというのは、本当に身にしみてそのように思っているんですけども、今までは学生ということできたと思うんですが、ここに地域の人材派遣——先ほどちょっとお話の中でも触れられましたけれども、新しい視点が加わるということであるならば、それがまだ私自身、そういった意味でのティーチングアシスタントを活用した経験がないので、うまくイメージはできないんですが、まずこのイメージ図のティーチングアシスタントという右下にある、ここに、じゃ、そうすると、もう学生ではなくて、ここの表記を変えなければいけないということが1つですね。

それともう一つが、現状、ティーチングアシスタントというのは、いずれは教員を目指したいと、その夢を追いながら、少し現場にかかわれば自分自身の勉強にもなるからということで、幾ばくかの謝金は出ていますけれども、ほぼボランティアという意味合いで来ていて、私たちも採用試験の少し前になれば、じゃ、これだけ頑張ってくれているんだからということで、少し面接練習につき合っあげたり、論文を添削してあげたりと、学生にとってもメリットがあるという部分をやっぱり提供していかなければいけないというふうに思ってやってきました。

ところが、今後これが事前研修とか夏季研修ということになると、ボランティアでかかわっている人たちに、いや、研修を受けなさいよ。それから、夏はこれがあるからちゃんとしてねという形で対応ができるのかどうか。そうすると、ティーチングアシスタントの位置づけみたいなものが、ある意味、ほんとうに時給幾らですみたいな形になっていれば、当然、研修を受けてくださいという話にはなっていくんだけど、現状そうではない中で、ほんとうに研修ということに、逆にいうと——学生も勉強することがデメリットには、もちろんなるなんていうふうには思っていないけれども、でも、一定程度そこで拘束をされたりすることが、かえって学生さんたちを集めにくくしないだろうかというふうに思います。ここでうたわれると、きっとそういうふうになっていくだろうというふうに思います。今まで検討したときに、どんな検討をしたか今思い出せなくて、経過がわかっただらちょっと教えてください。

【事務局】 研修については、ティーチングアシスタントも学生さんなんですけれども、いきなり学校に行って、学校で発達障害のお子さん等につくわけなんですけれども、対応の仕方がなかなかわかりにくいので、市教委のほうで事前に基礎的な対応の仕方とかもやっってから配置したらどうかというような意見もあったものですから、事前研修とかという話になっています。

それから、学生さんも、今の育成という視点がありましたので、そういう意味では発達障害に関することを理解していただいて将来の教員に役立てていただくという意味でも、研修という位置づけもいいのかなどというふうに思っているのが1つです。ただ、それが強制とか、それから、そのときの謝礼がどうなるかというようなところも詰めなくてはいけないところはあるんですけれども、一定TAの質の向上というのを目指そうという内容です。それが1つです。

それから、地域の人材が出てきたというのは、実は学生さんを確保するということが非常に今難しいのが1つあります。それから、せっかく見つけた学生さんも、大抵3年生と4年生でかかわって、長くても2年ぐらいで終わっていくんですね。次から次へとかわっていくので、せっかく研修しても、あるいは慣れたところでも、また次の新しい人が来て1からという話があるので、学校としてもなかなか対応が難しいだろうというのがあります。地域のボランティア的な形でのかかわりが持てないのかどうかを研究するというのが1つあります。

それから、実際に実績としても、今幾つかの小学校のほうに、地域の人材ということで

教員免除を昔持っていてかかわりたいという方がもう入っていることは確かなんです。そこで、同じ住んでいるところの学校に入ると、保護者との関係とか、児童のプライバシーの関係もあるので、住んでいる地域ではないところをお願いして入っていただいているという、そういう実績もあるので、そこを少し見ながら、どう進められるのかなというのを今後研究していきたいと思っております。

以上です。よろしいでしょうか。

【委員長】 学校現場としては、とにかく学生の数があるほうが大事なんではないでしょうか。それとも、ある程度やっぱり研修を受けて、研修を受けるぐらいだったら行きたくないと言って多少人数が減っても、一定程度の研修を受けてくる。それも受けてさらに来るという動機づけを持った学生が必要なのか。もうそんなことは言わない。とにかく今、人が少しでも必要だし、やる気があるならば研修等は後回しになっても人が必要という感じなんではないでしょうか。

【委員】 学校にもよりけりだと思いますけれども、自校では量が欲しいですね。やっぱり人手が欲しい。

【委員長】 量が欲しい。なるほどね。

【委員】 うちのTAを今、大学の4年生を3名配置していただいているんですけども、非常に厳しい条件の中で、授業の合間を見て学校に来ていただいて、サポートスタッフとかいろいろ——特別支援学級だと小学校は介助員と言っていますが、中学校は指導補助員と言っていますね。指導補助員とかなり謝金が大きく違うんですよ。介助員や指導補助員の方とは教員が一定の時間をとって打ち合わせができるんですね。個別の指導をめぐったり、終わった後の指導についても。ところがTAについては、授業の合間を見えますから、終わるとまた行くというようなことで、2つの大学から3名来ていただいているんですが、ここにきて1人あれなので、年度途中でかわるというような状況もあって、非常にTAの動きというのは、たくさん欲しいんですけども、学校現場で教員と密な打ち合わせができないという現状が1つです。

それから、教員免許取得予定か教員免許状を持っている方、大学院性とか、そういう方が対象なんですけれども、十分なお礼ができないという言い方は変ですけども、これはぜひ教育委員会に厚い支援をお願いしたいと思うんですが、ほんとうに申しわけない気持ちでいっぱいという現状があるんでね。そこはやっぱり過大な期待をTAに——学校現場としては欲しいんですけども、期待と同時に受け入れる環境整備といいますかね。今

は交通費程度です。TAの待遇という言い方は変ですけど、将来教員になるんだから、そのための資質を向上するという本来の目的もあるので、あまりにも期待されている役割に対して十分なことをできないという、現場としては申しわけないなという気持ちがあるのは事実ですね。

【委員長】 基本的にティーチングアシスタントは教免を取る予定の人なわけですよ。サポートスタッフというのは、心理の大学院生とかで、教免と関係なしという形で入ってくるというふうに分けているんですよ。橋本先生、ちょっとこの辺で何かありますか。

【副委員長】 今のサポートスタッフとかTAの話ですけども、実は学生側からしますと、確かに先生方がお忙しくて話をしてくれないと。ただこの子についていてと言われて、終わったら学生は戻っていかなくちゃいけないものですから、先生方とじっくり打ち合わせをする時間も結局ないと。不安のままについていて、ずっと不安で、ほんとうに自分はここにいいのか、役に立っているのかというのもわからずに帰ってくるというのがほとんどなんですね。ですから、むしろ、時間の取り方は工夫しなくちゃいけないと思うんですけど、まず一括して、こういうことをあなたたちにはやってほしいし、こういうことが学校には役立つんだよということを研修会のような形でやっていただいたほうが、学生はすごく安心します。

そして、どうついていいのかわからないものですから、もう一つ言うと、先生によって、こうついてくれ、ああついてくれというのは違うものですから、ほんとうにこのつき方でいいのかというのは非常に不安で帰ってくるんですね。学生自身は、今はやっぱり勉強熱心な学生も多いので、学びたくて行っているんですね。だとすると、実はついていだけで、ほんとうにいいのか悪いのかという自分にフィードバックがかかってこないと、やはりだんだん嫌になってきますので、褒めてほしいわけではないんですけど、あなたがやっていることはすごくいいよ、正しいよ、効果が上がっているよということを教えてもらえる。学校の先生方にそれをやってくれというのは、おそらく時間的には難しいし、学生たちの時間の折り合いもつけられませんので、おそらくそれは、市教委としてどこかで時間をとっていただいて、何かやっていただく機会があるといいんだろうなと思います。

お金のことはもちろんあったほうがいいんだとは思いますが、なかなか財政的な問題もあるでしょうし。だから、学生にとっても将来的なメリットになるような形でやってあげることが1つで、そういう意味での研修会ということなのか。だから、オプションでやるということではなくて、学生たちにとって安心、または安全に、もう一つ

は、やっぱり学校というところは個人情報もたくさんあるところですから、それについての管理というのは、実際大学でもそういう授業が始まりましたけど、まだまだ実際に学校に行って、こういうことはしゃべってはいけないとか、それを友達に伝えてはいけないなんていうことは、実際にはそう細かくは言われてないですね。やはり研修として必要だろうと思います。

それから、地域の人材というのは、今、課長さんがおっしゃったとおりでして、やはり定着していく人をつくっていきたいということと、学生ばかりには——おそらく今後、学生の数も減ってきますから、それから、いろいろな意味で縛りもかかってくるので、教員免許を持っていて、免許更新制というのも今年から始まりますけれども、免許は持っているけど、実際に働いてないという地域の方もいらっしゃるので、そういう方々をぜひ市教委が掘り起こしていただいて、同じ地域に住んでいる方とか何とかというのはまた問題があると思いますけど、子育てを終わられている主婦の方でもいいですし、ちょっと時間があるからという男性の方でも結構ですし、そういう方を掘り起こして活用していくということも、これは国としても都としても結構打ち出している方針ではあるので、やっていただきたいなということが1つあります。

それから、別件ですが、スクールソーシャルワーカーのところで、確かに国の制度としては不登校対策をうたっているんですが、私は、ぜひ、この特別支援教育の問題はこの中でもずっと論議されていましたが、発達障害が原因で不登校を起こしている児童・生徒もものすごく数としては多いわけですね。それから、家庭にいろいろな問題を抱えている、保護者が問題を抱えているという方々も多いので、福祉的なケースワークというのはどうしても求められるわけで、これがどこまでスクールカウンセラーや学校のコーディネーターができるかという、今のデータの中では非常に限界があるということが言われていて、福祉課との連携ということになると、どうしてもその地域に精通したワーカーさんが学校に来ていただかないとということで、モデル事業でもやはり元教員、元校長先生、地域に顔がきくいろいろな人を知っているという人をやっぱり使ったほうが非常に効果的だということがある。で、学校の現場もよくわかる人となると、社会福祉士を持っているほうが望ましいと言われてはいますが、そういう立場の方じゃなくてということがこれから多分出てきますので、このあたり、不登校対策も視野に入れて役割についてと書いてありますけれども、もう少し、できれば事務局の方に強く、特別支援教育の中でのスクールソーシャルワーカーの役割は非常に大きいというところを、ぜひ私なんかは書いていただけると

ありがたいなというところです。

【委員長】 実は私は山ほど学生をいろいろなところの学校に派遣しているんですが、武蔵野市で——私の学生は心理ですから教免を持っているとか、取ろうとする学生ではないです。ですが、いわゆるサポータースタッフとしては派遣をしていません。学生を私の研究室のきちとした特定の学習指導を受けた者がスーパーバイズを受けることも、学校に了承を得た上で、学生の心理的サポート、知識的なサポート、それから、学校自体のサポートを間接的に行うという形で派遣をして、全く無料で行っているんですね。

いろいろな現場の先生方と話をしていて、先ほど先生の声聞いて、ああ、そういう声もあるんだと思ったんですが、量があればという学校があるという、この事実も知らなきゃいけない。受けとめなきゃいけない。

ただ一方では、いろいろな学生を入れていて、やっぱりその学生によっていろいろなトラブルが起こっているというのも事実としてある。そういう意味では、猫の手も借りたいという時代ではなくなってきた、ボランティアというのは基本的に自分の自主的なやりたいという気持ちでボランティア活動はいろいろありますけど、学校の中に入って、対子どもに向かう支援・援助活動というのは、ただ本人のやりたいという意識・意欲だけではできないということで、うちの学校なんかはかなり研修をしてから派遣しているんですね。

そういう意味で、もっともっと現場の声を聞きながらと今日改めて思いました。それでもやっぱり人数が必要だというこの現実は無視してはいけないんですが、一方では、本当にちゃんとした支援を目指していくには研修をする必要がある。これは1つは学生ボランティアを守るためにも必要なんですね。学生ボランティアのバーンアウトというのがほかの大学でもかなり多発しています。教師とトラブルを起こしてというような形で。そういう意味では学生自身を守るためにも、それから、もちろんそれは支援をしようとする相手である子どもたちを守ることもなるわけですが、そういう点でやっぱり研修で……。

橋本先生がおっしゃったように、学生ボランティアのバーンアウトの第1要因というのは役割の不明確化、これは文科省もはっきり言っています。何をしたらいいかが、当たり前なんですが、子どもによっても、学級によっても、担任によっても、管理職によっても考え方が違う。そんな専門性を持っていない学生たちがポンと行って、毎週同じであればいいけれども、今週は3年1組についてとか、今週は5年生のだれだれについてとかというところで、やっぱり非常に戸惑っているということが、これは文科省でも今言われているので、何らかの研修等で学校側の責任、あるいは派遣する側のほうでも責任を負える部

分は負っていかなきゃいけないと思うんですが、こういう研修ということはやっぱりちょっと考えて、それと、そのためにやりたい人がいなくなってしまうのは困るわけですから、サービスをきちっと安定して提供するということと、サービスの質というところに関して、ぜひ市教委と知恵を出していきたいと思います。

地域の人材をとというのは、私も別の地域大学で、地域の人材がボランティアとして各学校に派遣される前に、絶対に地域大学のある講演をとらなきゃというところで講師をしているんですけども、地域の人たちの理解を増やしていくためにも、そういった人たちに働きかけるのはすごくいいと思うんですが、この部分の負担を教員や学校にしてしまっただけは元も子もないわけで、こういうところでやっぱり市教委とか、あるいは地域の大学だとか、地域にいる専門家たちの力を大いにかりて、やっぱり研修して人材を育成するのは大事だろうと思いました。

ソーシャルスクールワーカーで橋本先生がおっしゃった不登校の問題は、パブリックコメントで課題としておりませんと言いつつ放っちゃっているのは、書き方を変えたほうがいいと思うんですね。十分こういう形で考えていると。

あと、発達障害が絡んでいるのは、もちろん不登校なんですけど、その背景に虐待の問題が絡んでおります。この2つの問題も橋本先生がおっしゃった不登校の問題とさらに複雑に絡んでいて、家庭を孤立させない——地域の中で家庭をネットワークの中に入れて孤立をさせないという意味でも、ソーシャルワーカーはその場に行って、訪問するという専門性というのは他のものにかえられないところがあると思いますので、その辺でも考えていきたいんですが、ただ、ちょっと書き方が漠然としているので、どう活用するのか、ほかの人が読んでわからないと思うんですね、片仮名がたくさん、いろいろな名前が出てきていますよね。私、大体、このティーチングアシスタントと学習指導員とサポートスタッフと出てきたところで、かなりアップアップしているんですけども、もうちょっとその辺に関しては、説明があるほうがいいかなとは思っています。

非常に具体的にまとめてくださっているんで、具体的な意見が出てきているんですが、先を急がなければならぬという使命感と、もうちょっと、もしご意見があるなら聞かなきゃという思いとで葛藤しておりますが、ご意見ありますでしょうか。行ったり来たりをするつもりで、Ⅱ章のほうに進んでいながら、おそらく関連することでまたもとに戻るところがあると思いますが、では、Ⅱ章の説明をお願いいたします。

【事務局】 Ⅱ章につきましては9ページからです。ここは2つのねらいがあります。

そのうちの1つは、特別支援教育に関する理解啓発促進のための取り組みの充実、これはこの委員会でも2回、ここのテーマについて議論したところですので、それをまとめたところでは。

9ページと10ページにかけてなんですけれども、それぞれ福祉部門とか子育て部門とか保健部門と一緒に教育も市民の理解、児童・生徒の理解を進めていくという趣旨で書いてあります。それから、特別支援学校のほうとも副籍を通じて協力してやっていくということにしてあります。

10ページの(6)を重点事業にしてあります。現在、千川小学校さんと第四中学校さんに特別支援教育の教育課題研究開発校ということで進めていただいていますけれども、ここでの取り組みを市内の各学校に広げていきたいというふうに思っております。

11ページは、その教育相談の中核であります教育支援センターのことについて書いてあります。(1)については、教育支援センター機能の見直しということを重点にしておりまして、教育支援センターの役割の見直し、あるいは教育委員会が持っている教育相談的な機能の統合化なり、あるいは連携なりを考えていきたいと思っております。これについては、場所とか、物理的な制約とかがいろいろありますので、すぐには難しいんですけれども、連携・調整を進めながらやっていきたいと思っております。

それから、教育支援センター自体が学校における相談の中心になっておりますので、引き続き派遣相談員、それから、幼稚園への必要に応じた巡回相談を徐々に進めていきたいと思っております。

以上が第Ⅱ章です。

【委員長】 ありがとうございます。ご意見ありますでしょうか、確認したいこと、質問すべて含めて。

【委員】 2の(3)の幼稚園への巡回相談の実施ですけど、これは保育園が入っていないのは意味があったんですか。

【事務局】 保育園については臨床心理士の方が回っているので、幼稚園をとということなんです。いろいろなところに行きたいんですけれども、教育センター自体も人手不足のところもありますので、保育園は現在の専門の心理職でやっていただければと。連携ということは進めますけれども。

【委員長】 何かその辺の説明がないと、保育園をあえて意図的に外されているような感じがしますね。

【委員】 そうですね。保育園は何もやってないようなイメージで受け取られる。

【事務局】 表現の中に、保育園との連携などを入れてみます。

【事務局】 11ページの中身のことでいいですか。

【委員長】 はい。いいです。

【事務局】 前から申し上げているとおり、センターの立場として、さっき第I章のほうは、それぞれ今の学校とかある程度今の状況の中でいろいろ改善工夫してやっていけると思うんですが、この11ページに出てきたところでは、ほんとうに支援センターを、場所的にも人的にも完全にスクラップ・アンド・ビルドというような感じで新たなものをつくるというような前提でないと、とても無理であると。今でも相談と学校派遣、それから、就学相談の部分でどんどん仕事が増えて、現在のカウンセラーの中でも結構大変だということ、今のことを片づけるだけで相当苦労しています。

その中で、今度その見直しというところで、センターがさまざまな総合相談窓口になり、それから、夜間相談、土曜相談、相談時間の拡充、それから、幼稚園の巡回、ハビットの連携、それから、教員やサポートスタッフ、さまざまなそういった研修のほうもいろいろ人材育成のほうまで入る。

それから、「便り」とか、そういったPR部門をやらなければいけない。相談派遣のほうでもいろいろな外部機関との中核になって、いろいろリソースを提供したり相談に乗ったりする。それから、校内においても、そこに書いてあるような校内委員会、いろいろなところでという、これを、今のセンターの教育支援というだけじゃない、教育界全体の指導的なような部分まですごく入ってきて、そういうものがほんとうに理想的にできるなら、それはそれでいいんですけども、私は今の現状とこの理想はあまりに大きく隔たりがあって、ほんとうにそういう方向で市が挙げて全部、今のセンターの跡地ぐらいにしっかりしたものを建てて、すべての部署に人員を配置してというような壮大な計画のもとでないと、あまりにも今の現状と開きがあり過ぎるということで、前から古賀先生とかはおっしゃっていましたが、改めて私も事務局の一員ではありますけれども、正直にセンターの今の苦悩を知っているから、中間まとめの抽象的な項目の中でも、このままではセンターのための支援センターが要するというお話がこの中でありましたけれども、それどころではないということで、すごく不安を感じます。正直なところを申し上げました。

【委員長】 ありがとうございます。地域にある専門性ということで、つい頼ってしまったのだと思いますけれども、これはあまりにも頼っていますよね。先ほどの専門家スタ

ップの活動のところでも、派遣相談員がそこにいてという、そちらでも書かれていましたけれども、今の現状を考えると、これをこのままやると、相談活動という基本的な部分というのが危うくなってしまうかなと思うのと、教育相談員がいうのは、基本的に教育相談員というのは、相談に来た人の味方になるというか、彼らのことをとにかくしっかり聞こうとする立場なんだけど、一方で学校側に入って、学校側で先生のために動いたりとか、いろいろな役割を持つことで、相談員が自分の中ですごく分裂していくと。

徹底的に目の前にいる子どもや保護者の見方になって話を聞いていく。一方で、学校の中に入っていったりとか、いろいろな活動が増えていく中で、まあ、できなきゃいけない部分もあるでしょうけれども、その辺で随分困惑している相談員たちも、どの地域にもすごく増えていっています。

なので、期待は大きいんだと思います。重要な拠点だとは思いますが、もうちょっとその辺を考えていかないと、せっかく生かせる力、専門性も生かせないのかなと思うんですが、具体的にはどういうふうにするか……。

【事務局】　今はとにかく少しでも前進させるためには、まず人員がもっと欲しいですね。ただ、今はもう人を増やすだけのスペースがないんです、今のセンターは。水曜日に全員集ると、今だけでも目いっぱい。それから、いろいろ仕事をするにはどうしてもスペース的な、空間的な場所も必要になりますので。

【委員長】　その辺は、事務局側としては何か考えていらっしゃいますか。

【事務局】　これは前からこの委員会でも古賀先生からのご意見もありましたが、実際には、既にもう手がけているようなところを改めてここに述べたということもありますのと、それから、実際には私どもも問題意識は持っていますので、このプランが実現する方向で内部的には検討していきたいというふうには思うんですけどね。

冒頭でもここの説明をしましたがけれども、物理的な制約とか、いろいろな制約があるので、直ちにはこの方向には行かないけれどもという、そういう前置きをしながら、関係の教育委員会が持っている相談機能の連携とか、あるいは総合化というところを目指していきたいなというふうに思っております。

【委員長】　最も本質的な中核的な機能である相談機能というのが低下しないためにも、今現在やっているということですが、実際私が派遣で回っていると、相談の予約が何カ月後しか入らないと。それぐらい先生方が忙しくなってしまうということもあるわけですけども。そうすると、彼らの本来の専門性である相談活動という部分が中途半端に

なってしまうということがないように、今現状やられていても、かなりぎりぎりの状態でこなしてくださっているところだと思うので、その辺をぜひ……。それで、やっぱり理想ではなく、実現できるような形にするためにはとても重要な部分だと思うので、これはできるだけ具体的に人員を増やすということも含めてお願いいたします。

第Ⅱ章に関しまして、ご意見があればお願いいたします。

【委員】 10ページの(4)の学校教育における交流及び共同学習、福祉教育の促進の②なんですけれども、障害に関する理解と認識を深めるためにということで幾つか紹介されていますけれども、結構今、いろいろな学校で直接的な交流といいますか、視覚障害の方を招いたり、あるいは、本校でもやったんですけど、車椅子バスケットの方を招いて、車椅子バスケットの体験をしたりとか、直接障害のある方を招いて、道徳の授業でTT的にご協力をお願いしたり、講演会をやったりというようなことで、こういう体験も大事なんですけど、障害者の方を招いた交流というのをいろいろな学校でやっているんじゃないかと思うので、ぜひこの中に1項入れていただけるといいのかなと思うんです。

【委員長】 かなり具体的に書かれているんですが、今言ったすごく基本的な部分というのは、ぜひとも含めていただいたほうが……。その他も大変具体的に書かれているところだと思います。実際にもうやられているということですね。

ほかにはいかがでしょうか。

【委員】 11ページの教育支援センターの、先ほどお話にありました人とか場所の問題があるということで、これを今すぐこのとおりにできるということはないわけですね。そういう場合に、それが確立できるまでに別の形でこういう方向性を進めていくというような、そういう考え方というのはできないというか、してないんでしょうか。結局、③とかの情報交換なんかを教育支援センターで取りまとめるとかいうことでなくて、直接保育園とかハビットの方たちの間でまずはやってみるというか、あとは④のところですけども、教員の夏季研修、こういうところなんかも、まずは市のほうで何かそういう場を設けて研修をどんどん進めていってという、そういう経過措置みたいなところを少し具体的に出せたらいいんじゃないかなと感じました。

【委員長】 はい。すぐできるわけではないけどおっしゃったけれども、そういう意味ではすぐにでも必要なサービスだと思いますので、その間を補えるような形、あるいは、でも、それでやっていってもいいわけですね、違う第三の機関といいますか、そういうのは何かお考えでいらっしゃいますか。

【事務局】 ここに書いてあることは、もう既に着手している部分も結構あるんです。例えば③の情報交換とかというのは、ハビットと一緒に連携が始まっていますし、ほかの団体とも意見交換をさせていただいたりしていますので、③は教育支援センターが情報の中心という書き方ではなくて、市内のいろいろな相談機関とつながっていきましょうということが書かれていて、実際にもそれに着手している。

④についても、教員の夏季研修で教育相談というコマが、2日間4コマだったですかね、そこのお手伝いをしていただいている。ちょっと前までは教育支援センターのほうで主導的に教育研修のほうを担っていただいているとかというのもありますので、一部やれるところはやっているところなんです。本格的に総合課とか、総合窓口課とか、そういったものになると、あっちこっちに散らばっている人をいろいろなところから集めてくるので、そういうのは物理的には無理ですけれども、ソフト的な対応なり、今のところでやれる範囲はそれぞれ進めているという状況だと思います。

【委員長】 ありがとうございます。ただ、今やれていても、多分、先ほどのお話ではかなり大変な状態でこなしていて、正直言って、このままいくと、重要な相談機能を中心とした本来のサービス機能が低下するということがないように。彼らはみんな人がいいですから、一生懸命な人たちなので、やるとは思うんですけれども、今おっしゃっていただいたように、例えば別のところが担えるようなものとか、ちょっとそれ用の小委員会を単発的に開いてアンケートを実施するとかというようなことは、教育支援センターにあまり負担をかけないでできる形もあれば、ちょっと検討していただくというのも今のご意見の中に入っていたように思います。

【委員】 理解啓発の事業にかかわる部分なんですけれども、ですから、10ページの(4)にかかわる部分なんです。ここに書かれている理解啓発事業というのは、例えばアイマスクにしても、車椅子にしても、点字にしても、ある程度外から見えやすい障害ですよ。ところが、一番学級で指導に苦慮するのは、遠くにいるそういう人たちではなくて、ごく身近なクラスの中にいるあの子、落ちつけなくて、ある時間ぶっと外へ出ていっちゃう。先生はそのことを許しているという、直接利害関係があるわけですよ。こういう子たちをきちっと理解啓発、ですから、隣にいる友達を理解していくというところの授業が今、必要なんだろうというふうに思っているんですが、そういう先進的な授業をやっているところが実はどこにもない。いろいろな講演会や何かに行くと、時々、理解啓発授業についてどういうふうにやっているのか知りたいという、みんなこういうことを言うんですね。

アイマスク体験があるじゃないですかとか、高齢者の体験でいろいろ関節にはめたり、視野を狭くしたり、ああいうのがありますよと。

実は聞きたいのはそうじゃなくて、身近にいるあの友達をどう理解するか、子どもがきちっと理解できないと、そのことの不満が保護者に行き、保護者は心配をするというのが今の現場の苦労だろうというふうに思っているんです。ですから、そういう軽度発達障害の子どもたちを理解するための理解啓発のための授業をどうプログラムしていくか、これはおそらくどこもやってないことだと思うので、ぜひ武蔵野市ではそれを手がけていただけると、学校はものすごくうれしいなというふうに思います。

【事務局】 今のところについて、とても新しい試みだと思っっているんですけども、それを10ページの(6)教育課題研究開発校というところで1番に書かせていただいていますけれども、通常の学級における特別支援教育のあり方という、ここに一言書いてあるんですけども、今、千川小学校のほうで授業の進め方、それから、当事者の子どもさんとほかの子どもさんとのかかわり方とか、個別指導的などところに配慮していくとか、そういったノウハウを今ずっとこの1年間やって、来年度もそのことを研究するというようになっております。ですので、そういったことを今後、ほかの学級にも広げていければなどというふうに思っているのが1つ。

四中さんは、逆に特別支援学級を中心に通常級とのかかわり方を研究していただいていると思うんですけども、そういった通常級の中の発達障害を持った子どもさんと、周辺の子どものかかわり方というのは1つのテーマにしていますので、それがうまく実を結べば、他の学校にも広がっていくのかなというふうに思っております。

【委員長】 多分そういうことをわかりやすく文章にすると……。これだけではちょっと読み取れないところですよ。

【事務局】 わかりました。

【委員】 今、田中先生がおっしゃった点で、ちょうど今、障害福祉計画策定中で最終段階に入っているんですが、その中で、障害福祉計画のほうの書き込みをご紹介したいと思うんですけども、特別支援教育、発達障害児の相談事業などとの連携ということで、途切れることのない支援ということで教育支援センターと共同して特別支援学級への支援を図るとともに、通常の学級における注意欠陥多動性障害、学習障害、高機能自閉症などの児童・生徒への支援を推進します。また、子ども・教育・福祉部門の実務担当者が定期的に情報交換をできる仕組みをつくりたいというような、最初はここまでの書き込みでは

なかったんですけど、やはりわかりにくい。今何が必要かというところで最終的にはこういう書き込みに落ちついているところなんですね。

【委員長】 かなり重要な部分ですから、具体的なほうがいいですよ。抽象的に書くとか、アバウトに書くよりは、今のような形で。田中先生がおっしゃったように、隣にいる友達というか、障害という名前が明確についてないこともあるわけですから、それをどう理解するかというようなところで、今いただいたような言葉を少し明確に取り入れてみるというふうな工夫をぜひしていただきたいと思います。

【委員】 教員向けにはLDとか、ADHDの近似体験みたいなプログラムを提供しているところもあるんですよ。それが小学生、中学生にどのような展開をしているかというところは、ちょっと私、わかりませんので、そこもちょっとお調べいただいて、橋本先生あたりがお詳しいのかな。

【委員長】 そうですよ。私もそう思いました。その辺、どうでしょうか。

【橋本副委員長】 今の話で、実は(6)は特別支援教育を課題としたとなっているので、田中先生がおっしゃったのは、簡単にいうと福祉教育の話ですよ。交流や共同学習も含めてですけど。だから、健康なお子さんたちに対しての教育の話でして、特別支援教育はそういった特別支援が必要だという対象になるお子さんたちへの教育のことを指しますので、推進を課題としたとなると、入るには入るかなと。ただ、非常にぼんやりしてしまいますので、その辺、もうちょっと明確にするとすれば、(4)のほうにもつけ加えていただいたほうが、③でも結構ですけれども、通常学級に在籍する支援が必要なお子さんたちへの理解を周囲の児童・生徒にも図っていくとか、教育をしていくということを研究開発するみたいなことが入っていくといいのかなと。

田中先生がおっしゃったとおりで、実は研究としてまとまったデータというか、実践は全くないんですね。手探りでやられているのが現状でして、それというのは、やはりお子さんや保護者の実態が違うというのと、地域でもやはりそのことに関して困るという保護者もいますし、いや、積極的にやってくださいという保護者もいるし、そういう実情があって、きちっとしたモデルの研究ができてないというのが事実ですので、さっき田中先生がおっしゃったように、武蔵野市で今、研究開発校があるのであれば、そこで少し触れていただいたり、やってモデルをつくっていただくことも必要なのかなと思います。両方にかかるのかなと思います。

【委員長】 ありがとうございます。私も依頼があって、障害を持つ子どもの兄弟た

ちへのワークというのをやっております。そのお兄ちゃん、お姉ちゃんが自閉症だとか、学校のクラスの中にいられないとか、それで不登校になっちゃうという、その子の兄弟たちというのもやっぱりいろいろなストレスをこうむっている。二次的ないろいろな問題が起こるといことも非常に多いものですから、そういう兄弟たちを集めたワークなんかをやることがありますけれども、そんなのもやっぱりこら辺のところ——これは2つ目の柱の理解促進への取り組みというところですので、織り込んでいくことが具体的にできればと思います。

【委員】 橋本先生、ほんとうによくわかるんですけど、ただ現実にはね、学級経営とか人権教育とかかわる部分で、例えばLDでも、アスペルガーでも、ADHDでも、それについてわかりやすく話すことはできるかもしれないんですけど、具体的に、じゃだれなんだという、そこでどう突っ込でいくかとかいうかね。それから、今、先生がおっしゃったように兄弟児の問題とかね、これは本校にもいるんですよ。下に固定級にいるとか、上がいて、お兄ちゃんのことには触れてほしくないという。兄弟であれば、なかなか、それを受容するのに時間がかかるのでね。項目として入れることはすごく大事なことですけど、実際にどこまでできるのかとかいうか、そこまで求められるとなると、非常に重い課題とかいうか、大事なことに、なかなか簡単にいかないとかいうか、自分が学級を持った場合、クラスでどういう学級経営をしたらそれができるのかとかいうのは、非常に……。

【委員長】 ほんとうに難しいけど、先生の言葉からわかるように、だから必要ないということではなくて、ものすごい必要性を感じている。ただ、ものすごい難しさも感じている現場からの声だと思うんですけども、おそらくこの項は理解促進への取り組みとして武蔵野市がどういう姿勢を持っているか、そして、それを取り組むときに、私、さっきの1のところでも言おうかなと思ったんですが、全体を通して私は何度も言っていて、何度も言っていながら入っていないと思うのは、当事者からの声を吸い上げる、声を聞く、そして、私たちがある取り組みをしたときに、当事者からフィードバックをもらって、私たちの取り組みをどう評価してくれているかを聞いて修正するという、当事者からの、つまり、障害を持った子ども、あるいは障害を持った子どもの親からの声を吸い上げ、それで私たちが取り組んだことをちゃんと、どういうふうに評価してくれているかというところを聞きながら進めることだと思うんですが、それをどこに入れるかわからないんですが、先ほどの1のところかなと思っても、1のところどこにも入っていませんよね。

今、先生がおっしゃったのは、現場で必要ないというんだったら、おせっかいに専門家

がいろいろ働く必要はないんですが、やっぱりそういった声を拾える場所をどこかにつくっておくことで、我々のほうとしては考えているけどすぐにそれを実行に移すかどうかは別として、声と対話をするというのかな、やっぱり当事者、現場で生活している子どもや、いわゆるクラスメートからでもいいですし、その声を拾うどこか機関というのかな、窓口みたいなものがないと、何となくトップダウンみたいな形で、とてもしっかりした建物は建ててそうなんですが、地面の部分というのが危ういような感じがします。

今のことには多分、すぐに答えが出る部分ではないと思いますが、現場では必要だけど、取り組みの難しさを感じているという問題こそ、現場の声を吸い上げながら進めるものだと思うので、その辺ちょっと含めてぜひメモをとっておいていただきたいと思います。

まだあるかと思いますが、ちょっとⅢ章にもまいりたいと思いますので、Ⅲ章のほうをご説明をお願いしますでしょうか。

【事務局】 Ⅲ章、新たな連携体制の整備ということで3つ方向性を示してあります。

一番目は横の連携ということで、教育・医療・福祉による幼児・児童・生徒・保護者支援事業の推進ということで、3つほど具体的に挙げさせていただいております。

二番目は教育と母子保健・子育て・療育の積極的連携による就学支援事業の推進ということで、これは時間軸で縦に書いてあります。そこには、今日いらしていただいている保健とか福祉というところのかかわりを述べさせていただいています。重点事業では、14ページの(3)にありますように、就学前機関と小学校との連携の充実というところを重点にしたいと思っております。

三番目、専門機関との連携による学校支援の充実ということで、こちらにいらっしゃっています橋本先生とか、小金井特別支援学校のご協力をいただきながら内容を進めていきたいと思っております。ここの重点としては、先ほどのお話にもありましたけれども、ティーチングアシスタントとかサポートスタッフの人材確保なり、質の向上というところを挙げさせていただいています。

以上です。

【委員長】 ありがとうございます。急がせてしまいました。Ⅲ章に関しまして、いかがでしょうか。お力を借りながらということで、國松先生、何かありますか。

【委員】 3番の専門機関との連携で、実線が囲んである枠の中には、大学や都立特別支援学校という書き方がありますが、(3)の特別支援学校のところには、センター校で「小金井特別支援学校」とピンポイントで書かれて、ああ、これは頑張らなくちゃなあと思っ

ているところですが、学区域を持つということでは、田無特別支援学校、これは西東京ですが、高等部の単独校がありまして、これ、武蔵野市さんも学区域だと思うんですね。なので、こちらの中学校の学級を卒業された多くの方が田無特別支援学校に通っていると思うんです。そういう意味では、義務教育段階は過ぎていますが、ADHDですとか、発達障害系のお子さんは相当程度高等部に進学していますので、そういうお子さんの予後ということも含めまして、何かしらアドバイスできるところが田無特別支援学校にはコーディネーターもおりますし、ノウハウがあると思うんですね。なので、どこか名前を出していただくとか、「小金井特別支援学校等」というふうにさせていただくとちょっと肩の荷がおりるかなと。決してやらないという意味ではありませんけれども。

【事務局】 福祉のほうと田無特別支援学校とは何か連携をやっていますよね。そのような形で田無特別支援学校との連携という表現をさせていただいていいでしょうか。

【委員】 社会に出ていく手前のところでは田無さんが一番多いです。もちろん武蔵野の場合には東学園がありますけれども。ほかにも府中であつたり、ぱらぱらといらっしゃいます。

【委員長】 そうすると「等」とするか、あるいはその辺、少し……。

【事務局】 字句も含めて、内容も含めて、関係している障害福祉課と調整しながら入れたいと思います。

【委員長】 そうですね。具体的に書けるのであれば。

【事務局】 はい。

【委員長】 ほかはよろしいでしょうか。橋本先生、いかがでしょうか。

【副委員長】 特にありません。

【委員長】 福祉のほうでもよろしいでしょうか。

そうしましたらば、最後の4つ目の柱です。お願いいたします。

【事務局】 特別支援教育推進のための基盤整備ということで、2つ視点を挙げています。特別支援学級等の整備と推進状況の評価・検証という仕組みについてです。特に1番目の特別支援学級等の整備の中で、先ほど学級のところでも少しお話ししましたが、情緒障害等指導学級（通級）の整備のあり方を検討するということが重点事業にしております。やはり特別支援学級のノウハウを通常の中に広げていきたいという事務局のほうの思いがあります。それを1番にさせていただいております。

②が、これも先ほどちょっと触れましたけれども、「知的・発達障害指導学級」仮称なん

ですけれども、その研究を行っていく。その研究を行う中で、課題となっている情緒障害学級の指導時間数の制約とか、知的障害学級におけるさまざま児童へのきめ細かな対応、あるいは、そういったことを含めて新たな、例えば情緒障害学級の固定学級の設置等も含めて検討していきたいと思っております。

③が特別支援教室モデル事業の検証と拡充ということで、モデル事業の検証を進め拡充していきたいと思っております。

2番目に特別支援教育推進状況の評価・検証なんですけれども、従来ありました特別支援教育推進委員会あるいは推進協議会を見直して、検証を行う役割に改めていきたいと思っています。ここについては、保護者当事者になるかどうかなんですけれども、保護者等を含めた特別支援教育推進委員会を設置したいというふうに考えております。

【委員長】 ありがとうございます。この最後の柱に関しまして、いかがでしょうか。

【委員】 これは、特別支援教育のいわば武蔵野市のこれからの全体計画というふうなイメージが強いんですね。この間、議論には乗ってこなかったんですけれども、院内学級だとか肢体不自由学級がどうなっていくのかというのは、ここからは見えてこないんですね。確かに議論になっていませんので、新たに何か議論しろとか、そういうことではなくて、現状維持ならば現状維持というところが出ていないと、院内学級と肢体不自由はどうするのだろうかというふうに思いますので、どこかでちょっと触れていただくとありがたいです。

【委員長】 それはどうですか。

【事務局】 今回の委員の発言については、7ページのほうに特別支援学級等の充実のところに少し表現していきたいと思っているんですけれども、よろしいでしょうか。

【委員長】 初めの柱の中の3の(2)ですか。

【事務局】 (2)ないし、または(3)を起こすかどうかですけれども、両方とも固定学級ですので、(2)のタイトルを変えて固定学級のあり方とかというふうにして、そこに入れ込むとかいうのも考えられますので、表現の仕方は別として、このポジションのところに入りたいと思うんですけれども、よろしいでしょうか。

【委員長】 いかがでしょうか。重要な部分だと思しますので、お願いいたします。

ほかはいかがでしょう。

【委員】 15ページの上の点線の囲みの中の「教育ニーズ」あるいは「教育的ニーズ」の使い分けの意図的があるのか、むしろ揃えたほうがいいのかなどという感じもします。そ

れから情緒障害等指導学級とか情緒障害学級とか、「指導」という言葉の取り扱いはどうでしょうか。

【事務局】 通常は情緒障害等通級指導学級という表現ですが、正式に調べて修正したいと思います。

【委員長】 ありがとうございます。ほかはいかがでしょうか。

【委員】 「教育ニーズ」と「教育的ニーズ」は、これは同じということでもいいですね。

【事務局】 はい。これはどちらかに合わせます。

【委員長】 ほかはいかがでしょうか。

【副委員長】 実は申し上げるべきかどうかあれなんですけど、この最終報告が何年間か使われることだと思うんですが、文科省のほうで毎年2月に特別支援教育に関するネットワーク会議という各種団体を集めてやる会議があって、そこで来年度の特別支援教育に関する研究事業とかモデル事業が全部公表されるんですけど、都はまだはっきりそれに対してどうすると言っていないけれども、情緒障害学級という言葉が実質的にもう合っていないと。自閉症のお子さんがほとんど入っているということで、来年の研究モデル事業で、国のほうでは自閉症・情緒障害学級という言葉を使うようなんです。それでモデルを1年、2年やった後には、大概そのままその名前を使っていくということなので、今の段階では情緒障害学級だからいいのかもしれないんですけど、自閉症学級とかという言葉もいずれは入ってくるはずなので、そういう言葉が本文中に入るとかということもあってもいいのかなと。この会議はいわゆる通常学級にいるお子さんたちに対する支援が主に議論されてきたところがありますので、そういう面からいくと、実は通級のほうでも特に自閉症・情緒障害学級という言葉は今後文科省では扱うようなので。

文科省は情緒障害学級という言葉の削って自閉症学級にしたかどうかという案もあるらしいんですけど、余計なことかもしれないんですが、この最終報告を何年使うのかなというところがあってということです。

【委員長】 素朴にどういう子が行くんだらうって、そんなに知らない人は思いますよね。情緒障害というのといわゆる発達障害というのは違うものと考え方もいらっしゃるかもしれないですね。その辺についてはちょっと……。

【副委員長】 事務局にお任せしてもらっていいと思います。

【委員長】 そうですね。お願いいたします。

【事務局】 名前で利用する、しないというのもありまして、福祉のほうも、ハビット

なんかは障害という言葉を使わないでハビット事業を進めようとしているところがありまして、結構名前に敏感なところもありますので、それはちょっと考えさせていただきたいと思います。

【委員】 15ページの一番上のタイトルなんですが、特別支援教育推進のための基盤整備というふうに書いてあるんですけども、中身を見るとソフト的なものが非常に多いので、基盤というとどうもハード的なものをイメージしてしまうので、むしろ体制整備ぐらいにしたほうが何か内容に合うような気がするんですが、いかがでしょうか。

【委員長】 体制整備ですね。少しソフトウェア的な部分があると。

【委員】 そうですね。これからの時代、ハードの整備というのはもう難しい時代ですので、そういうように誤解されないようにしたほうがいいのかなと思っています。

【委員長】 確かに内容としては中身のあり方というところをかなり強調して書かれているところがあって、体制整備ということもちょっと考えていただいて、改善していただけたらと思います。

ほかはいかがでしょう。こうやってざっと見たところで、この段階で初めのA案、B案に戻ってもいいのですが、どうしても省略したくないパブリックコメントというところがあって、パブリックコメントもやっぱりしっかり把握してからA案、B案というところにはいかなければいけないので、引き続いてパブリックコメントのほうにざっと目を通して——ほんとうはざっと目を通してはいけない、じっくり目を通さなきゃいけない部分なんですが、ちょっとお願いします。

【事務局】 パブリックコメントですが、今日、皆さんにお出ししましたので、ボリュームも結構ありますので、次回の最終回に具体的には反映させていただきたいと思っています。今日はさわりだけお話しいたします。

パブリックコメントにつきましては14人の方からお申し出がありました。項目としては59です。中身は後ほどお読みいただきたいんですけども、意見要旨というところがありますけれども、申し訳ないんですけども、事務局責任でボリュームをすごく縮めています。今回のパブリックコメントの特徴の1つでありますけれども、保護者とか当事者の方からもご意見をいただきまして、自分たちの子育ての経験とかをすごく熱い思いで語って、3ページにもわたって思いを語っていただいているんです。それを、ほんとうは全部載せたい、皆さんにも読んでいただきたいと思ったんですけども、一応計画に反映するようなところのみまとめさせていただいて、ここに示してあります。委員の皆さんの中

で、意見を全文読みたいということでしたらお出しいたしますので、よろしく願います。

それから、意見要旨のところにあります分類というところなんですけれども、凡例を見ていただきたいんですが、この中間まとめに全く載ってなくて新規で項目を指摘していただいているところは◎にしてあります。それから、触れてはあるけれども、ちょっと突っ込みが足りないので、もうちょっと追加してほしいというようなところでは○、反映し書き込むということになっています。それから、◇については、いろいろな意見としてはあるんですけども、既にそれは本文中に表記してあるので、本文には影響しないけれども、簡単に市教委の考え方を述べているもの、それから、□のところなんですけれども、意見が重複しているのでまとめさせていただきましたというところ、それから最後の9ページにまとめていますけれども、直接この委員会に関わるものではなくて、他課のものに関わるもの、例えば経済的なものとかというようなところがありますので、この委員会の議論には馴染まないのかなというものを△にしてあります。

そういう形で見ていただいて、その分類の右側に策定委員会の取扱い方針及び市教委の考え方ということで、事務局の対応の考え方、コメントを載せてあります。右側のほうに本文項目ということで、ページと該当する項目を載せてありますので、こちらの体系図とあわせて見ていただければわかりやすいのかなと思っております。

私のほうでは、今日はもう時間を過ぎておりますので、概要だけにしていきたいと思っております。よろしく願います。

【委員長】 ありがとうございます。これは、今のお話ですと次回のときにしっかりともう一回読んできていただいて。

【事務局】 事務局のほうからお願いなんですけれども、次回はもう最終回になっています。私どものほうとしては、この市教委の考え方、取扱い方針に基づいて本文中に反映するものは反映して次回の委員会に出したいと思うんですけども、この対応の仕方がちょっとまずいぞというような場合には、皆さんからの事前の意見をできればいただきたいと思っております。

【委員長】 次の委員会ではなく、それまでの間に。

【事務局】 そうですね。

【委員長】 具体的にいつまでとかありますか。2月いっぱいぐらいでは遅いですか。次回は3月9日なんですよね。2月いっぱいじゃ遅いですかね。

【事務局】 今度は最終回ですので、事前に本文を正本のような形でお配りしたいと思いますので、例えば2月15日ぐらいまででよろしいでしょうか。もしこのパブリックコメントの取り扱いについていろいろなご意見がある場合には、2月15日ぐらいまでにお願ひしたいと思います。

【委員長】 ぜひ、どんな些細なことでもいいですので、ご意見を寄せていただけたらと思います。ちょっと今日は時間の関係もありますので全部拾えませんが、ぜひ生かしていきたいと思います。

というところで候補A、候補Bに最後にちょっと戻っていただき、改めて見ると、やっぱりこれはまずいだらうとか、こっちだらうとか、ご意見がありましたらお伺いして、今この場で、こういうのは多数決で決めるものではないのかもしれないかもしれませんので、ご意見を伺ったならばこちらのほうで少し調整をして、次回最終回にこういう感じでどうかという提案をさせていただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。実にさまざまな意見が出ましたので、短いほうがいいとか、できるだけ具体的にとか。

【委員】 短いのが確かにいいと思いますので、「願いをつなぎ・支援をつなぐ武蔵野市の特別支援教育」で切っちゃうというのはいかがでしょう。

【委員長】 後半は切るとのことですね。

【委員】 ええ。そこまで切っちゃう。

【委員長】 短いほうがいいだらうということで、「夢につなぐ」は切って。ただ、先ほどもお話がありましたが、下の4行の中に、共に生き、共に育つとか、その辺の説明が入ってはいませんが。

【委員】 「の推進をめざして」も取ってみては。

【委員長】 「推進をめざして」も取ってしまい、「つなぐ武蔵野市の特別支援教育」までですね。「めざして」も取ってしまって「教育」まで。

【事務局】 長いということでしたら、これは武蔵野市の計画というのはわかっているので、場合によっては「武蔵野市」というのをとってでもいいかなとも思ったんですけど。

【委員長】 「願いをつなぎ・支援をつなぐ特別支援教育」、ちょっと短か過ぎますか。

【事務局】 そこでやると「武蔵野市」が入ったほうがいいことになるんですけども、3つポンポンときて特別支援教育の推進をめざしてというならば、武蔵野市はとってもいいと思うんですよ。幾つかパターンがありそうな感じがしますので、難しくなりますね。

【委員長】 さらに案が増えて次回は出てきそうですね。

【事務局】 とにかくAかBかのどっちかかなというところは……。

【委員長】 でも、今のところ、AかBできれいにではなくて、Aにちょっとこれを足すか、Bをちょっと変えてと、大体みんな、そんなご意見ですね。

【事務局】 いや、どちらかを中心にとか、主にという、その辺の方向性だけもらえるとうれしいんですけども、どうでしょう。主たるものをどっちに置くかという。

【委員長】 主たるものをどっちに置くか、これはどうしましょう。何となく多数決で決めるようなことではないような気がするんですけども。

【事務局】 わかりました。委員長、副委員長先生と事務局でよろしいでしょうか。

【委員長】 ええ。ですので、ぜひ意見だけお聞かせください。これは絶対というところで。要は下の4つのところがしっかりしていることと、中身がしっかりしていることですので、看板として掲げるものだというところで。

じゃ、先ほどいただいたご意見を集約して、ちょっと難しい宿題が出ましたけど、橋本先生と、それから事務局とで決めていきたいと思いますので。もちろん最終回のときにもご意見をいただいて構わないですね。その場でまた何かあれば修正というのが可能なわけですね。

【事務局】 はい。

【委員長】 わかりました。以上をもちましてきょうの第7回委員会を終了したいと思います。

(3) その他

次回は、3月9日（月曜日）18時30分から開催します。

— 了 —